

機関番号：32666

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520251

研究課題名(和文) アイルランド小説における女性身体と女性空間をめぐる研究

研究課題名(英文) Functional Aspects of the Female Characters in the Portrayal of 'Irishness' in Irish Fiction

研究代表者

中村 哲子 (NAKAMURA TETSUKO)

日本医科大学・医学部・准教授

研究者番号：20237415

研究成果の概要(和文)：アイルランドにおけるプロテスタントの地主一族とそれを取り巻くカトリック農民との関係を軸とした小説群(その多くはビッグ・ハウス小説とも呼ばれる)に注目し、そこに描かれる女性登場人物の心身やその行動範囲にかかわる問題、また作品の地域性の問題について解き明かした。その過程で、アイルランドで執筆活動を展開する作家にとって、イギリスの読者を意識しつつ、それぞれの立場でアイルランド性をいかに描くかがきわめて重要な問題であることも明確となった。

研究成果の概要(英文)：Focusing on Irish 'big house' novels and other novels dealing with the relationship between Protestant landowners and Catholic peasants, the present research explores the female characters' mental and physical problems and the geographical settings in which the characters operate. The research makes it clear that the writers carefully selected their settings to make the 'Irishness' they wished to convey more appealing to British readers.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：アイルランド小説、ビッグ・ハウス、女性、身体、旅行記、コネマラ

## 1. 研究開始当初の背景

4年ほど前に本研究課題の着想を得た背景には、次のようなアイルランド文学研究の動向、および個人的に育んだアイルランド小説についての研究テーマがあった。

(1) *Field Day Anthology of Irish Writing* (Vols. I-III, 1991; Vols. IV-V, 2001) がアイルランド文学のテキストを確定する試みを行って以降、アイルランド文学や小説を体系的にとらえる研究が精力的に展開されてきた。文学史については Margaret Kelleher

and Philip O'Leary, eds., *The Cambridge History of Irish Literature* (2 vols., 2006)が網羅的な研究書として刊行され、小説論については、John Wilson Foster, ed., *The Cambridge Companion to the Irish Novel* (2006) や Jacqueline Belanger, ed., *The Irish Novel in the Nineteenth Century: Facts and Fictions* (2005) がアイルランド小説の伝統について、その特徴や問題点を詳らかにした。

(2) 個人的には今世紀に入ってからアイルランド小説に焦点を当て、研究を行ってきた。身体医文化論研究会やアイルランド小説研究会などでの活動を通じて、アングロ・アイリッシュ作家の描いたビッグ・ハウス小説に「耐える女性」のイメージを引き継いだ女性たちが描かれている点、また、女性が受ける身体的、精神的苦痛のあり様にも特定の傾向が見られることがわかってきた。その際、民族主義的な色合いの濃い、アイルランドの伝統に根ざした詩や戯曲との関連性についても意識された。

## 2. 研究の目的

アイルランドという土地や国家が女性として表象される文化的・文学的伝統は、アイルランドが長くイギリスの支配下にあったことに深く根ざしている。こうしたアイルランド表象には、ケルト的、民族主義的なゲールの伝統が色濃く反映している場合も多い。

本研究は、アイルランドだけでなく広くイギリスの読者を強く意識して書かれたアイルランド発信のリアリズム小説において、女性がどのように描かれ、それがアイルランド性の表出とどのように関係し、アイルランドからの声として広く受け止められていったかを探るものである。

リアリズム小説を概観すると、アイルランドに特有とも言えるプロテスタントのアングロ・アイリッシュの地主層とカトリックのアイルランド農民の対立と依存の関係が重要な枠組みを提供していることが読み取れる。宗教的、政治的な確執の歴史を背景として、異なる立場の女性がどのような心身にわたる苦痛を抱え、どのような空間を占有するものとして小説に描かれていたかは、複雑な様相を呈している。アイルランドがイギリスに併合された1801年前後から現在にいたる小説の中から、本研究の文脈で重要とみなされる作家・作品に注目し、それぞれの作家・作品の位置づけを明確にしつつ、そこに込められた女性像とアイルランド性のありようを詳らかにしようとした。

## 3. 研究の方法

次に挙げる作家の小説を中心に、(1)～(5)に具体的に述べる方法に沿って研究を展開した。Maria Edgeworth, Sydney Owenson, Charles Lever, John and Michael Banim, William Carleton, Sheridan Le Fanu, Edith Somerville and Martin Ross, Elizabeth Bowen, Jennifer Johnstone, Molly Keane, William Trevor

(1) 必要な一次および二次資料を継続的に入手し読み込み、論理的考察を展開した。

① 研究基盤となる一次資料(小説および関連文学作品)のテキスト入手。

書籍として国内外から購入したほか、アイルランド国立図書館などでの書籍およびデータベース利用、一部複写物購入。また、英国図書館から書籍のデジタルイメージ購入。Google ブックスなどオンライン資料の活用。

② 研究書・研究論文などの二次資料入手。

研究書は国内外から購入したほか、国内の図書館から貸借および一部複写物購入。研究論文は国内外より複写物購入。アイルランド国立図書館などでの書籍およびデータベース利用、一部複写物購入。

(2) (1)にある論理的考察をまとめ、国内外の学会・研究会での研究発表、および論文の形で公表し、幅広く批判を受けた。

(3) 2010年度のIASIL Japan および日本アイルランド協会アイルランド研究年次大会それぞれにおいて、シンポジウムを企画した。シンポジウム発表にいたるまでの間、数か月にわたる準備期間中、スコットランド文学研究者、アイルランド小説研究者、アイルランド史研究者、中部ヨーロッパ史研究者とともにきわめて有意義な研究活動を展開することができた。

(4) 国内外の学会・研究会に随時出席し、関連研究についての知識や情報を得た。

(5) 4回にわたりアイルランド各地において、ビッグ・ハウス小説を執筆した作家の生家であった地主の館、および研究上重要な地主の館や城を訪ねた。現在の個人所有者から直接話を聞く機会を持ったほか、現在観光施設として利用されている箇所では見学する機会を得て、それぞれについて日本では入手しにくい関連資料を購入した。フィクションの世界で描かれた地主の館のありようを理解する貴重な機会となった。

#### 4. 研究成果

研究成果として具体的な形となった論考について、その内容を具体的に記す。

##### (1) ゲールの文学伝統との関連性：

ジョナサン・スウィフトの『傷つけられた婦人』(*The Story of the Injured Lady*, 1746) は、アングロ・アイリッシュによってアイルランドが不実なイングランドによって捨てられた女性として描かれた鍵となる散文である。アレゴリーを用いてイングランドに執拗に心身ともに搾取されるアイルランドを耐える女性として提示したものだが、彼女の思慮の足りなさは、彼女を論ずる男性のディスコースによって明確にされる形を取っている。

この作品と同様の物語の枠組みを持つ散文が、18世紀末にアイルランド独立を目指すカトリックの『アンチ・ユニオン誌』に2点登場する。そこでは、不実なブリテンに対峙する冷静で強い女性、そして妖精のような美しさを漂わす女性が印象的に描かれている。それぞれシーラ・ナ・ギグ、そしてアシュリングの詩に登場する妖精エールを彷彿とさせるもので、女性的な身体性を武器にアイルランドの存在を訴える女性として立ち現れる。同じ物語の枠組みを持ちながら、ここではカトリックのアイルランド性をアピールする女性へと変貌を遂げた姿を目の前にすることとなる。

こうした民族主義的な色合いの強い女性のイメージは、アイルランドのイギリス併合を前向きに捉えるナショナル・テイルの1作品、マライア・エッジワースの『倦怠』(*Ennui*, 1809)にも登場する。地主である主人公の年老いた乳母、そして彼のあこがれの存在であるアイルランド貴族の若き女性の存在は、アイルランドに縁が深いとされる「忌まわしい婦人」(*The loathly lady*)の伝説を読者に意識させる。土着のアイルランドの文学伝統をリアリズム小説に組み込もうとするアングロ・アイリッシュの女性作家のアプローチが読み取れる。

19世紀最初の4半世紀にアイルランドで書かれたナショナル・テイルと呼ばれる作品群は(エッジワースやシドニー・オーウェンソンの小説が代表的)、イギリス併合後のアイルランドへの期待を男女の結婚というアレゴリーを用いて描いたものである。この時期のアイルランド発信の小説は、すべてロンドンで出版され、多くのイングランドの読者にアピールするアイルランドらしさを小説に漂わせる工夫が求められた。オーウェンソンの『ワイルド・アイリッシュ・ガール』(*The Wild Irish Girl*, 1806)においても、ゲールの古歌「オシアン」の詩(ジェイムズ・マクファーソンによる三部作により注目さ

れる、1761-63)が重要な役割を果たしている。

18世紀末の民族主義的な動きとの関連で、ゲールの伝統がリアリズム小説に与えた影響については、アイリッシュ・ロマンティズムの文脈で注目されているが、個別作品の分析についてはさまざまに議論を展開する余地があると思われる。

##### (2) 西アイルランドの意義：

オーウェンソンは、『ワイルド・アイリッシュ・ガール』でアイルランド西部、コナハトに住む由緒正しい血筋を引く地主の娘を主人公に据えた。この気高いアイルランドを象徴する女性は、当時、多くの読者から高い支持を得ることとなった。オーウェンソンは、『オブライエン一族とオフラハティ一族』(*The O'Briens and the O'Flahertys*, 1827)でもゴールウェイ州のコネマラ地方を舞台としているが、1820年代より、それまで外部の人々の入り込むことが稀であった辺境地帯、ゴールウェイ州やメイヨー州といった西アイルランド一帯では、国家開発プロジェクトによってインフラ整備が進み、徐々にこの閉ざされた地域に人々の流入が始まっていく。それとともに、この地域がアイルランド性を印象づける地域として捉えられるようになる。

コネマラ地方は、18世紀末、アイルランド最大の地主、リチャード・マーティンの所領として知られていたが、1820年代、1830年代にはこの地域に移り住んだ地主やこの地を訪れた旅行者の手になる旅行記によって、この地域の様子は徐々に広く知られることとなる。コネマラのたぐいまれな美しい風景と、独特のカトリック文化圏のありようは、アイルランド性を強く意識させるものとして人々の関心を惹きつけていった。この背景にあるのは、1829年のカトリック解放法設立前後のアイルランド農民層全般への関心の高まりであった。そもそもマーティン家は、カトリックのアングロ・ノルマンの家系を持つ地主でもある。

この西アイルランドのマーティン家は、1840年代後半のいわゆるアイルランドの大飢饉を契機として、1849年に広大な土地を手放すにいたる。最後の当主となったのが、「コネマラの王女」と呼ばれたメアリー・マーティンであり、夫とともに新天地を目指してアメリカに渡った直後に亡くなっている。この悲劇のヒロインとも呼べる人物は、チャールズ・リーヴァーの『マーティン領のマーティン家』(*The Martins of Cro' Martin*, 1856)のモデルとされ、同名のヒロインとして登場する。アイリッシュ・ハイランドとも呼ばれる荒涼としたコネマラで、縦横無尽に馬を駆る自然児メアリーは、安穏な生活を送

る地主層とは異なる空間に生きる、この土地を象徴する女性として描かれている。

このモデルとなった歴史上のメアリーは、自身小説を発表していた人物であり、彼女本人を彷彿とさせるヒロインが登場するコネマラを舞台とした小説、『ジュリア・ハワード』(*Julia Howard: A Romance*, 1850) を発表している。そこには、プロテスタント作家のリーヴァーが描くヒロインとは違い、アシユリングの妖精エールの様相を呈したジュリアが登場し、コネマラという土地を表象する彼女は、ゲールの文学伝統を読者に意識させる人物として立ち現れる。

メアリー・マーティン本人については、マライア・エッジワースが書き残した『コネマラ紀行』(*Tour in Connemara and the Martins of Ballinahinch*, 1950) が多くを語っている。エッジワースは 1833 年、いまだ幹線道路が整備されていないコネマラを訪れ、マーティン家の館に 3 週間滞在し、メアリーを身近に知る機会を得る。アングロ・アイリッシュの地主の家に育ったエッジワースにとって、辺境の地、コネマラの大地主の娘は、自身がそれまで触れたことのないタイプの女性であった。エッジワースの描くメアリーは、リーヴァーとのそれとも異なるもので、現実の西アイルランドを象徴的に表す女性像は、描く立場によって微妙にその様相に変化がもたらされることが明確となった。

エッジワースが西アイルランドに特別の興味を抱いていたことも注目される。60 歳代半ばにして辺境を旅する女性作家の存在は、特異であると言ってよい。1820 年代、1830 年代に書かれたこの地域に関する旅行記を中心とする記述は、すべて男性の手になるものである。

19 世紀後半、歴史上のメアリー・マーティンは、アイルランドの没落地主の象徴としてさまざまな媒体で繰り返し語られ、辺境の大地主であった女性の悲劇として認識されていく。それは、大飢饉以前の古い時代の地主のありようとして、アイルランド農民の政治的な勢力が高まる中、新たな意味を付与されて語り継がれることとなった。

この一連の女性、地域、小説、歴史といった要素が絡まる主題は、小説世界に留まらないアイルランド文化の一側面を明らかにすると同時に、アイルランド理解・受容に小説が果たした役割を再認識させてくれる。メアリー・マーティンに関する個別研究は稀であり、伯母でもある作家、ハリエット・マーティンの作品も視野にいれて考察を広げることで、カトリック文化圏から発信されるアイルランド性がより明確に浮かび上がると考えられる。

(3)カトリック出身作家の描く女性たち：

エッジワース、オーウェンソン、リーヴァーといった作家に対して、カトリックの中流・下層階級の世界を詳らかに描いた作家に、カトリック出身のジョン・バニムとマイケル・バニムの兄弟、そしてウィリアム・カールトンがいる。彼らは、1820 年代より作品を発表しはじめ、19 世紀後半にかけて、もうひとつの小説の系譜を築くこととなった。彼らが目を向けたのは、地主の生活圏よりもカトリックのアイルランド農民、都市生活者や犯罪に手を染める者たちが生きる世界であり、そこには、アイルランドの別の姿が立ち現れる。こうした作品をアングロ・アイリッシュ作家らの小説と読み比べることにより、小説をとおして示されるアイルランド性が、作家の置かれた立場によって大きな開きのあることが理解される。

バニム兄弟やカールトンの文学世界では、階級、宗教、性によって三重の抑圧を受ける女性たちが描かれているが、社会の犠牲者、脱落者としてその周縁部に追いやられることが多い。それにもかかわらず、そこには、教育を受ける機会にも恵まれず、ある限られた範囲でしか生きられないながらも、たくましく生き抜く女性たち、あるいは男性社会を脅かすような存在となる特殊な力を付与された女性たちが登場する。その描き方には、ゴシック小説で心身ともに抑圧を受ける女性像との類似性や、その一方で聖母マリアに通じる慈愛の象徴ともなる女性像に重なるところがある。

犠牲者としてのカトリックの女性たちは、次の世代のアングロ・アイリッシュの作家、たとえば、イーディス・サマヴィルとマーティン・ロスの小説などにも登場することとなる。

地主とその支配を受ける農民やその周辺のカトリック社会のありようについて、カトリックのアイルランド人の視点から書かれたものを読むことで、別のアイルランド性が明らかとなり、より広い文脈でアイルランド文学の位置づけが可能となる。

(4)精神的・身体的障害を抱えた女性たち：

ビッグ・ハウスを舞台として、その地主の家に生まれ育った女性が精神的・肉体的に病んだ女性として描かれる小説が、20 世紀後半に登場するようになる。その前兆と捉えられるヒロインの登場する作品として、エリザベス・ボウエンの『最後の九月』(*The Last September*, 1929) が挙げられよう。決して病んでいるとは言えないものの、ヒロインであるロウイスは、アイルランド独立戦争を背景に、アングロ・アイリッシュが抱える過去における支配の歴史に対する罪の意識を写し出すかのように、自分の置かれた立場に戸惑い、ある種の呪縛の中で生きる姿を呈してい

る。同様に、過去にとらわれる女性はボウエンの『愛の世界』(A World of Love, 1955)にも登場する。

精神障害に悩む女性や、身体障害を抱えたビッグ・ハウスに住む女性たちが意識的に描かれている小説の中で、特に次の作品は注目に値する。モリー・キーン『いくたびも』(Time after Time, 1983)、ジェニファー・ジョンストンの『目に見えぬ虫』(The Invisible Worm, 1991)、そして、ウィリアム・トレバーの『ルーシー・ゴールの物語』(The Story of Lucy Gault, 2002)である。こうした小説では、アングロ・アイリッシュとカトリックとの間の歴史的確執を背景に、女性たちがトラウマに悩まされることとなる。身体的障害は、精神的トラウマを象徴する形で示される。行き詰まりを打破し、精神的安定を獲得しようとする試みは、語りという行為を鍵として、展開されていく。

20世紀後半のビッグ・ハウス小説では、精神的・身体的障害を前面に打ち出した作品が散見され、アイルランドの文脈で現在注目が高まっているトラウマ・スタディーズとの関連で、さらなる議論が展開できると考えている。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

- ① Tetsuko Nakamura, 'Searching for New 'Irish' Characters: The Banim Brothers, William Carleton and Charles Lever', *Journal of Irish Studies*, 26 (2011), forthcoming. 査読有
- ② Tetsuko Nakamura, 'Interrelated Travel Discourses on Connemara and Joyce Country in 1830s', *Journal of Irish Studies* 25 (2010): 18-27. 査読有
- ③ 中村哲子「The Princess of Connemaraをめぐる言説のラビリンス」『エール』29 (2009): 3-19. 査読有

[学会発表] (計8件)

- ① Tetsuko Nakamura, 'Searching for New 'Irish' Characters: The Banim Brothers, William Carleton and Charles Lever', IASIL Japan Conference, 9 October 2010, Komaba Campus, Tokyo University.
- ② Tetsuko Nakamura, 'The Literary and Cultural Reception of the "Princess of Connemara"', IASIL Conference, 27 July 2010, National University of

Ireland Maynooth, Ireland.

- ③ 中村哲子「コネマラの Ballynahinch Castle — 歴史とフィクションのはざままで」日本アイルランド協会アイルランド研究年次大会 2008年11月30日 大阪経済大学.
- ④ 中村哲子「ビッグ・ハウス小説とその空間世界」日本アイルランド協会 公開講座 2008年6月14日 東洋大学(白山キャンパス).

[図書] (計2件)

- ① 中村哲子 (2009)「ビッグ・ハウス小説の伝統」『アイルランド・ケルト文化を学ぶ人のために』風呂本武敏編 世界思想社 (pp. 40-52).
- ② 中村哲子 (2009)「アイルランド併合とゲールの伝統 — スウィフトからエッジワースへ」『中世主義を超えて — イギリス中世の発明と受容』松田隆美・原田範行・高橋勇編 慶應義塾大学出版会 (pp. 185-212).

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

中村 哲子 (NAKAMURA TETSUKO)  
日本医科大学・医学部・准教授  
研究者番号: 20237415

##### (2) 研究分担者

( )  
研究者番号:

##### (3) 連携研究者

( )  
研究者番号: